豊田市分科会

10/12㊎

足助交流館 飯盛座

パネルディスカッション

田舎においでん！ ～魅力ある山里と都市との共生～

「田舎においでん！ ～魅力ある山里と都市との共生～」

コーディネーター

法政大学現代福祉学部准教授

図司　直也
ずし　なおや

愛媛県生まれ。東京大学農学部を卒業し、東京大学大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻に学ぶ。2005年に同研究科博士課程を単位取得退学。博士（農学）。財団法人日本農業研究所研究員、法政大学現代福祉学部専任講師を経て、2009年から現職。財団法人地域活性化センター・地域リーダー養成塾主任講師、地域振興・人材育成に関するアドバイザー等を歴任。専門分野は、農山村政策論、地域資源管理論。
主な著書は、『農山村再生の実践』（共著：農山漁村文化協会）、『現代のむら―むら論と日本社会の展望』（共著：農山漁村文化協会）、『若者と地域をつくる』（共著：原書房）など。

パネリスト

特定非営利活動法人ひっぽUIターンネット理事兼事務局長

吉澤　武志
よしざわ　たけし

宮城県生まれ。東京学芸大学大学院社会教育学科在籍中からNGO活動に関わり2002年から１年間タイ東北部の農村に暮らす。そこで中山間地の持続的な地域社会づくりの重要性を実感。2004年春、住民活動が盛んな宮城県丸森町筆甫地区の人と自然に魅かれ移住。地区の移住交流の推進を行うひっぽUIターンネットの設立と組織運営に従事するとともに、地区住民全員で組織する住民自治組織「筆甫地区振興連絡協議会」の事務局長も務め、少子高齢化・過疎化等の様々な課題を持つ地区の地域づくり活動に日々汗を流す。

邑南町商工観光課主任

寺本　英仁
てらもと　えいじ

島根県生まれ。東京農業大学卒業。ネット通販サイト「みずほスタイル」の立ち上げや、田舎の逸品コンテスト「Oh！プロジェクト」の企画など、食を通した地域ブランド化に取り組む。2011年に「地域産業おこしに燃える人」の第三期メンバーに選出され、また、2012年には総務省の「地域人材ネット」に登録された。現在は、素材香房味蔵で農業から料理までを一貫して行う人材「耕すシェフ」を「A級グルメ」の担い手として育成するなど、農林商工等の異業種が連携して、地域食材を切り口としたビレッジプライド（町民の誇り）の確立を目指し、雇用創出や定住促進へとつながる様々な企画を展開している。

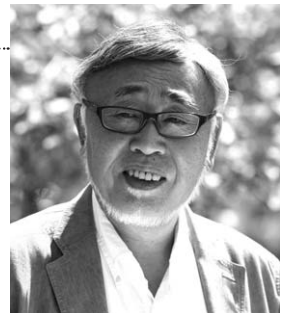
豊森なりわい塾実行委員長

澁澤　寿一
しぶさわ　じゅいち

東京都生まれ。東京農業大学大学院博士課程修了。博士（農学）。1980年パラグアイ国立農業試験場に赴任。帰国後、テーマパーク「長崎オランダ村」、循環型都市「ハウステンボス」取締役として、企画段階から建設・運営段階まで携わる。1997年からNPO法人「樹木・環境ネットワーク協会」理事長として、日本や各国の環境NGOと森づくり、地域づくり、人づくりを実践。地域の里山保全、奥山の環境修復、都市の緑地や公園のメンテナンスなどをNPO、企業、行政の協働で進める。豊田市・トヨタ自動車・NPO法人「地域の未来・志援センター」共催の新環境教育プログラム「豊森（とよもり）なりわい塾」実行委員長。

地域再生診療所所長

井上　弘司
いのうえ　ひろし



長野県生まれ。2003年飯田市在任中に観光カリスマ百選（国土交通省）に選ばれ、同市産業経済部エコツーリズム推進室長、産業経済部企画幹、企画部企画幹を務める。2008年４月に地域再生診療所設立、同年８月しんきん南信州地域研究所設立主席研究員に就任。現在、地域活性化伝道師（内閣府）、地域再生マネージャー（ふるさと財団）、長野県観光審議会委員。グリーン・ツーリズム等の推進手法の指導、観光まちづくり事業体の設立指導、地域再生の手法や地域づくり・人づくり（農村活性化、マネジメント）、地域活性のための地域診断及び再生のための総合プロデュース、過疎・中山間地域の総合計画づくり、食・文化・歴史・自然を活用した体験プログラムの開発などを全国で指導。

豊田市総合企画部長

鈴木　辰吉
すずき　たつよし

図司　改めましてこんにちは。法政大学の図司と申します。よろしくお願いします。ちょっとスタートが遅れましたのでパネルディスカッションの時間がどうなるかと心配しておりましたが、事務局から12時20分まで引っ張っていいとお許しが出ましたので、短い時間ではありますけれども、ぜひパネラーの皆さんとフロアの皆さんとで議論を進めていきたいと思います。

私、昨年に引き続き分科会のコーディネーターを仰せつかりました。今回の事例表彰の選定委員を宮口先生のもとで務めさせていただいたというのが一番の御縁ではありますけれども、もともと私自身、中山間地域問題、あるいは過疎地域問題、集落問題を、全国を歩きながら勉強させていただいているという経緯があり、このような場にもお声かけをいただいたと承知をしております。

改めて、ひっぽUIターンネットさんと邑南町さん、事例表彰おめでとうございます。先程、二つの地域からご報告いただきましたけれども、改めてその取組の分厚さと濃密さを皆さん方と共有できたのではないかと思います。あと、それに加えて今回は豊田市さんにもパネラーとしてご登壇いただいております。冒頭の部分で市の取組をご紹介いただきましたけれども、豊田市さんとしても過疎地域を抱える中でどう手を打っていくのかということを、まさに今、真正面から取り組まれていますので、いろんな形で議論にご参加いただけるのではないかということで、ご登壇いただいております。

それでは、パネルを進めていきたいと思いますけれども、私なりに、大きな目的を二つ持って進めたいと思っております。ひとつはやはり、「先程の二つの受賞された地域から学ぶ」ということだと思います。ある意味、先発的に課題に取り組み、それを乗り越えてゆき、またそこに新たな課題に直面していると思いますけれども、先発事例から、これから頑張ろうと取り組む地域が何を学び取っていくのか、ということを共有するのがひとつの目的かなと思っております。

もうひとつは、先発事例であっても課題に直面しているのだろうと思います。ひっぽさんはやはり東日本大震災による原発の影響、これはかなり深刻な影響ですけれども、今回の受賞を機に果敢にどう立ち向かうのかということをお考えになっていると思います。あるいは邑南町さんも先程の町長からのお話ではまだ取組を始めたばかりだという話がありましたけれども、過疎問題に対してはかなり長年の取組をされてきて、今に至っていますので、そこにはかなりこれまでの経緯で、ご苦労もあるのではないかと思います。ですので、そういう先発する地域ならではの課題に対してどう知恵を寄せていくのか、ということもおそらく今回のパネルの大きな目的になろうかと思います。

それは、何より今回、澁澤さんと井上さんお二人にこの場からご参加いただいていることに、まさに象徴されるかなと思います。澁澤さんと井上さんから、豊田市さんも含めて３地域のお話をうかがって、御感想なり、ポイントだったり、こういうところをもうちょっと聞いてみたい点を少し挙げていただきたいと思います。ご用意いただいた資料を全部ご紹介いただくとそれだけで時間が必要になるかと思いますので、うまくお考えいただいて、まず、最初のコメントをいただけたらと思います。

それでは澁澤さんからお願いしてよろしいですか。

澁澤　澁澤でございます。私は豊森という事業を豊田市でちょうど４年前から始めて、その関係でここに登っております。私は「共存の森ネットワーク」というNPOの人間でもあって、主な仕事は、全国の高校生たちに森や海で生きてきたじいちゃんばあちゃんたちの聞き書きをさせるという仕事で全国を回っています。その御縁で、この豊田市に10年ほど前から通わせていただいています。

実は、豊田市の中に非常に面白い仕組みがございまして、「千年委員会」と申します。今日は、私は豊森で来ておりますけれど、この千年委員会の一人としてここで話をさせていただこうと思っております。先程、安田調整監のほうからお話があったように、豊田市は大変いろいろな取組をされています。いろいろなハードも充実してきておりますし、いろいろな制度も充実してきている。それから、行政と地域とがどう組むかという地域システムも非常に充実してきております。その中で、私ども千年委員会というのは、豊田の町場ですとか山側ですとかを含めて、この地域で活動しているNPOたちの非常にゆるいネットワークなのですね。月に一回くらい集まって、いろいろな課題を話し合おうよということをやっておりまして、私どもの視点から見た時に、たぶん地域というのは、どんなにシステムを作っても、どんなにハードを作っても、またそこにどんなに行政が金額ですとかいろいろな形で助成をしても、私は、地域はなかなか動かないのだろう、というか地域は幸せになれな

いのだろうな、というふうに思っているのです。要するに、行政のサイドで作っていく、言葉あるいは数字に置き換えられる単語から、地域の住民にとってはそこで幸せを持って生きがいを持って生きるという、非常に観念的な用語の間を、橋渡しをする組織というのが必ず必要だと私は思っていまして、まさに、ひっぽさんがやられていることはその部分だと思うのですね。いったいその地域の住民が、そこに住むことがどう幸せであるのかというようなこととか、それと、じゃあいったい今の制度をどう結び付けるか、あるいは都市と農山村をどう結び付けるのか、ということを、間に入って、地域の方々の背丈を超えずに一緒の視点で考えていくという人たちが必ず必要になってきて、そこで翻訳をしていかないとなかなか行政の制度だけでは人は動かないのだなということを、二人のお話を聴いていて、ひとつは感じました。

それと、もうひとつは、今、過疎地の問題というのは、多くは過疎対策といろいろな政策を、邑南町さんをはじめ、いろんな先進的な取組をされています。だけど翻ってみますと、先程、安田調整監から話がありました、豊田というのは1960年前後から急激に違う町になっているのですね。1959年にトヨタ自動車元町工場ができました。その時期というのは、ちょうどこの地域で農地の基盤整備が大体終わった時期。基盤整備が終わった、農業に機械が使える、長男坊が農業を機械でやって次男、三男がトヨタの工場で勤められる。これは豊かになるぞと、みんなが希望を持ちました。ところが今度は次男三男だけでなくて長男もトヨタの工場で働くようになった。次にはお父さんもトヨタの工場で働くようになった。結局、豊田の中山間地というのは、全国でも稀なぐらい急激な過疎化が進んでいき、高齢化が進んでいったというところです。実はその急激に人を集めた、まさに日本の高度経済成長という仕組みなのですが、それが、そろそろおかしくというか、違うフェーズになろうとしている。例えば海外生産に拠点がどんどん移っていく。高度成長・右肩上がり、が都市がどんどん成長して農村を支えるということ自体が、もう可能な時代ではなくなってきているのだというふうに、私たちは感じています。つまり、都市の側に問題がものすごく出てきた。端的な例は2012年、今年というのは、ちょうど団塊の世代が65歳を迎えます。60歳定年でだいたい5年間嘱託で残りますから、今年から急激に元気で企業年金をもらった方々が町場でものすごく世の中に出ている。その方々が行く場所はデパ地下ぐらいしかないのですよ。その方々が、社会性を持って社会と取り組んでいただくとか、農山村を見ていてずっと思うのですけれど、ゲートボールが盛んなところって、どんどん過疎化していくのですよ。で結局、じいちゃん、ばあちゃんがものすごく忙しくて、若い連中に使われて、使われてゲートボールする場もないっていうようなところは、過疎になっていかないのです。つまり、お金がいくらか稼げる職業があるかというよりも、その人が必要とされている社会があるかっていうことがものすごく重要で、実は今、都市の人、65歳以上の方々が、社会の中でどう必要とされているのかということが、ものすごく模索されている。それと同時に若者の雇用がなくなって、若者がいったい自分たちが何に向かって生きていくのかが無くなっている。その解決は、実は、こちら側の農山村側に、すべてあると私は思っています。実は、農山村の過疎化の問題ではなくて、これは都市の問題ですね。都市の過疎化はもっと急激に来ます、これから。都市というのは、ある年代層だけがまとまっていますから、急激に都市も過疎化していきます。その時に都市の問題をどうするかという答えを、逆に15年先に、私たち農山村側が用意をして、いろんな皆さんの発表されたように、いろんなトライをして用意をして、新しい社会像を作っていく。だから皆さんの地域だけの考えだけではなくて、都市と自分たちがいったいどういう社会像を作れるのかという視点で考えなければいけない時代になったのかな、というふうに聴いておりました。

図司　ありがとうございました。澁澤さん、スライドは全く使いませんでしたけれどよろしかったですか？

澁澤　適当に資料として見ていただければと思います。

図司　おそらく、今お話いただいたことを含んでいると思います。後程ゆっくりご覧ください。

それでは井上さん、続いてよろしいですか。

井上　こんにちは、井上です。澁澤さんの話を受けて、私はスライドを使わせてもらって。ただ、スライドの中で見せたいのはこれだけなのですね。

今、最後に澁澤さんのほうで話がありましたように、都市の急激な過疎化というのは、非常に深刻な問題な

のですね。いずれ東京がこういうふうになるのですよ。怖いですね。何がいけないのでしょうね。私はこれ、産業のみでは消滅するという言い方をしておりますけれども、都市は、確かに今は、勤め先があるでしょう。でも、どうなるのでしょうね。東京も2050年くらいには高齢化率50％くらいになっているわけですね。変わりませんね、あんまり。とすると何が違うのか。いかに心豊かに生きられるいいところ、昨日講演の中でありましたけれども、先進地域というのはやはり過疎地域なのですね。ここがいかに頑張れるか、これが新しい日本を創り出していく一つの大きな方向ではないかなと思っています。かつて農山村というのは、今みたいに景気が低迷してきて就職先がないというと、それを吸収できるだけの力を持っていました。ところがそういうのがちょっと今、高度成長の中でそういう力を全部剥ぎ取ってきてしまったということがありまして、その吸収する力がなくなっちゃたんですね。で、なかなか帰るところがなくて、どこかガード下にそのまま住みついちゃっているかどうかっていう、そんなような状態になっているわけなのですね。そういう意味で、これから過疎地域というところが先進地として何をしていこうか。大事な点というのはやはり、これも澁澤さんが話をしたようにお年寄りもみんな役割があるのですね、その役割を奪ってしまっているのが都市の状況でして、田舎ですと皆さん役割を持っていろいろやってもらっている。それから、まだまだ地方のほうでは「結（ゆい）」という共同作業、そういうような相互扶助の精神がまだまだ残っていますので、そういう点で非常に救いがあると、そういうふうに考えております。

ここで、この写真を出したのは単に「産業のみでは消滅する」ということなのですけど、何がなくちゃいけないか。一番大事なのは、実は、自然なのですね。土なのです。土がある、土を耕す、森の中で遊ぶ、あるいは森の作業をするということの大事さというのが、これから日本人にとって大事なことになってくるのじゃないかなと。砂漠だけのところではやることがなくて結局、戦争しなくちゃいけないという状況の中では…。緑豊かな中ではみんな心安らかに生きられる、そういうふうな格好になっていくのは大事な点で。コミュニティというのがきちんと維持できる、そういう中で豊かな生活ができる。これがこれから過疎地はできていくと。

今日、邑南町さんの町長さんがお話をされましたけれど、少子化というので、少子化の率だとかあるいは

高齢化率を見るということではなくて、数字できちんと挙げていましたね。大事なのはやはりその辺なのです。特に、高齢化50％なんて気にする必要ないですよ。問題は生まれてくる子供たち、そこで暮らしていく子供たちが何人いるかというほうが重要でして。人数ですね、実数です。率じゃありません。ですから、そういう点で非常に邑南町さんが素晴らしいのは、きちんと数値目標で挙げて、これを達成していくのだという目標を掲げている点が非常に素晴らしいなと、私はそんなふうに感じました。

図司　分かりました。お二方まずはありがとうございました。井上さんも資料はほとんど使っていませんので、皆さんの方でご確認ください。

どちらかというと少し、二つの事例なり豊田も含めて、三つの地域の事例を支える背景、社会背景というのでしょうか、そういうところを挙げていただいたのかなと思います。特に二人に共通していたのは、役割とか出番みたいな話がひとつでしょうか。もうひとつは先程の井上さんからお話しいただいた数字の捉え方というのでしょうか。おそらく邑南町さんも、先程、井上さんにお話していただいた数値目標もありますし、ひっぽさんのほうも、実際に数は少ないですけれども一人ずつ積み重ねていった実績もおありかと思います。あとは原発の事故後でもかなり、実は、残っていらっしゃる。出て行った方の数字が出ましたが、逆に引き算すれば残った方もかなりいらっしゃる、ということも実際あると思うのですね。そういう数字を捉えていくことが大事だろうというお話がまずありました。

それでは、今度は現場の皆さんに話を振っていきたいと思うのですけれども。苦労話とか課題のお話をお願いしたいと思うのですが、吉澤さんは先程頑張ってご

報告いただいたので、フロアにおられる庄司さんに振ろうかなと思うのですけれども、よろしいでしょうか？先程ご報告の中でご紹介いただいたこともありますので、現場で実践をされた地元の庄司さんの目線で課題だったり苦労話みたいな話だったりとかをお願いします。

庄司　庄司です。どうもお世話になっています。基本的に私たちがなぜこれを始めたかと言いますと、私たちの住む地区は80％が山で、四方八方を山に囲まれた地域でありまして、その中で、人口が減っていく中で筆甫をどうしようかといったとき、筆甫みたいな不便なところから出ていく子供は、実際、これは防ぎようがない、どうしようもない。人それぞれ生き方がありますから。それではどうしようかといったときに、筆甫が好きで、筆甫を愛して住んでくれる人をいかに入れるかということで、そこから始まったわけです。一番の苦労は、空き家があってもなかなか貸してもらえなかった。これが実際に一番苦労した面ですね。空き家がないために、筆甫に何回か足を運んだのだけれども空き家がなくて、もう待っていられないからと他の地域を探したという方がけっこう出ました。これは地域の方々に「なぜ我々が他から入ってくる人を受け入れるのか」と、そういう根本的なことが十分に理解してもらえなかったと言いますか、私たちの説明がまずかったと言いますか、そのへんがあるかと思います。それが一番の苦労でしたね。それからやはり、筆甫みたいなこういう山間地はどうしても封建的な面がありまして、なかなか先祖代々守ってきた家なり土地を離したくないと言いますか、そういう面がちょっとあったのかなと思います。それで、空き家を貸してほしいと願っても、なかなか貸してもらえない。その空き家がどうなるかと言いますと、最終的には潰れてしまうのですよね。潰れるけれども貸してもらえなかった、というのが当初の苦労でしたね。

僕らのところは10年この方なりますので、この頃は理解していただきまして、空き家を貸していただけるというところが出てきたのですけれども、今度は逆に、先程お話が出ましたように、放射能の影響で全然問い合わせがなくなってきたと。そういう結果が出てきております。

どうしてだんだんと家が貸してもらえるようになってきたかですが、我々が根気強くお願いしたこともありますが、移住者が地域に入って、地域に溶け込んでもらったということが大きかったですね。消防団なんかがその例としてあります。筆甫地区の中でも地元の若い消防団員がいますけれど､ほとんどが勤めているのですね。災害というのは夜起きるだけじゃないのです、昼間も起きる。Iターンの方々はほとんど家にいる。そうすると、万が一、不幸な災害が起きた時にはすぐに対応をしてもらえる、という面が理解されてきたりしています。あとは神楽。なかなか後継者がいなくてつまずいているところに､3名ほど神楽の伝承に関わってもらっています。あとは地域の役員になるとか、移住者が地域に自ら溶け込んでいったことが、10年経って評価を得られたのかなと思います。そういうふうに、10年経ってようやっと、地域にそれが理解されてきたというような状況であります。

図司　いきなりの振りでしたが、ありがとうございました。空き家の問題、10年かけてじっくりと、というところがひとつのツボではないかなと思います。

続いて、寺本さんです。先程町長からもお話しいただきましたけれども、実務のところで、いろいろ携わっていらっしゃると思うのですが、実際に進められて、すんなりいったのか、それともいろんな御苦労があったのか。よろしくお願いします。

寺本　先程、説明の方でカリスマの町長がすべてを語られたので、私が出てどうこう言うこともないですけれども。苦労ということ、あまり苦労というふうに思っていないのですけれども、実は「A級グルメ」って名前が付く前、合併を平成16年10月にしているのですけれども、なんとか、町長の方からもありましたけれども食をキーワードになんとか外貨獲得、それから邑南町を売り出していこうというふうに思っていまし

て、その中で産直市とかネットショップ、いろんな取組をやってきていました。私の方がその担当をやっていたわけですけれども、ずっと行政で産直市とか「みずほスタイル」というネットショップ、こういったものに携わってやっているうちに、自分は行政職員なのか販売員なのかちょっとわからなくなってきたりとかして、何をやっているのだろうと。自分は何をしたいのかなあと、そういうふうにちょっと思ったりするような中で、自分がやりたい、町民に本当に理解してもらうというのは、お互いの、産業なら産業、生活なら生活、そういうスタイルの良さを認識しあうということが非常に大事なのかな、ということに気づいてきたのが10年くらいかかってきているのです。最初はモノ売りから、お金が地域に入れば経済活性化するのだ、というような思いでやっていましたけれども、今、その思いがだんだんだんだん、やっている町民の一つ一つの魂がこもっているものを、お互いに認め合って、そういったことを暮らしている中で理解し合う。それが外の人から見ると「素敵だね」っていうことが、本当のA級グルメなのかなというふうに思って。そういったところで、自分の理解度、行政職員として何をしていけばいいのかというところが、トライ＆エラー、失敗をしながらそれでも走り続けてこられた。上司のおかげとか、町民、一緒にやってくれる生産者の理解、こういったことが非常に良かったし、苦労というふうには思ってはいないですね。

図司　ありがとうございます。やはり寺本さんの場合も10年の活動の中で思われたものが今に花開いているというところがある、というお話をいただきました。

次に鈴木さんにお願いします。豊田市さんも去年、旭地区で集落調査を始められ、まさに、これからチャレンジということで、試行錯誤されているところもあると思いますが、実際どうでしょうか。進められていてご苦労とか、こういうところを今課題として抱えているなど、少しお話しいただいてもよろしいでしょうか。

鈴木　パンフレットには私の名前がついておりませんが、頼んで登壇させてもらったわけではないのですけれども、ありがとうございます。出番を作っていただきまして。

苦労続きでございます。安田が事例報告のところで申し上げましたように、合併して７年がすでに経過し、2,400人が減り、約１割の人口が減ったと。市には「農山村振興本部」というのを総合企画部の中に作って、市長が本部長という肝入りで、先程紹介したようにおよそ考えられる取組というのはほとんどやって来たと。それでも効果が出ないということで実態調査を克明にやって、どの部分に力を入れれば進展するのだろうかということを、今取り組んでいるところです。従ってこの７年間、合併すれば通勤圏にあるようなところですので、通勤居住というような形を伸ばせば過疎は止まると、高をくくっていた節がありますが、実は、それは、全然、間違っていたということに今直面しております。

昨日から、全体会に出させていただいて、今、澁澤さんや井上さんのお話からも、人口減少先進地という、昨日、山崎亮さんという方から「人口減少先進地の皆さんは誇りを持ってください。」みたいな話があって、人口減少しても仕方ないのだと。あの方によれば、江戸時代には日本の人口3,000万人が今日１億2,500万人になったけれど、これから減少していく。どこまで減少していくのだろうかということを推計、あくまで推計ですが、また3,000万人ぐらいまで減るのだろうと。そうしたときに、先程、澁澤さん、井上さんがおっしゃるように、都市ですら過疎化になるということですから、人口が減るのはしょうがない。そういうふうに一旦は思ったのですが、先程の邑南町のレポートをお聴きして、増やすんだと。それをまっしぐらに取り組んでおられるというお話を聴いて、また今、心が非常に揺れ動く、そんな状況でございますけれども。

豊田市には他の都市とは違った特色があるので、何かそこで切り開けないだろうかということで思うところが一つございますので、紹介しておきます。

先程、邑南町さんは、難解地名で西の大関ということで、邑南町を有名にしてしまえばいいのだというふうに考えたのですが、豊田市の先人は、「挙母（ころも）市」と言ったんですが読みにくいので、トヨタ自動車さんも誘致したところだし「豊田市」にしましょうと。これは、もう大論争があってですね、そんなのでいいのかという議論もあったんですが、当時、まだ、昭和34年でございますので、モータリゼーションの走りで本当に車が売れるか売れないかわからない時にそういう決断をして、車がこれからの産業を引っ張っていくのだということを先人は見抜いて、究極のネーミングライツをしたわけでございます。豊田市もすごい工業都市なのですね。製造品出荷額は10兆６千億円ですので、もちろん

全国１位を９年間続けておりますし、製造業の従事者が11万人でございまして、これは市内全体の従業者の44.7％です。県の平均が12.6％ですので、断トツに製造業が多いということですから。何が申し上げたいかというと、企業城下町であるがゆえに生かせることがあるのではないか。先程、安田が紹介した労働組合、企業のCSRなどでこの山間地に関わっていただける動きがぐっと広がっておりますので、そのところをうまく繋ぐ仕組みができないかなということを思っています。

図司　ありがとうございます。

豊田市さんも合併して７年で、仮説が間違っていたのではないかと。これはかなりの勇気がいることだと思うのですが、それを踏まえて原点に立ち帰って、もう一度現場からというふうに動きを取られている。そういう背景があるというお話をいただいたかなと思います。

どうでしょうか、澁澤さん、井上さん。地域づくりの７年10年というお話、かなり長いスパンの話が出たのですけれども、プロセスの中で何が大事か、時間をかけるということはどうでしょうか。なかなかこう、気持ちがはやったり、現場の問題に直面して何とかしないといけないという部分はありながらも。そういう直近の課題と、時間をかけてじっくりやるということは、折り合いをつけていくというのはなかなか悩ましいところだと思うのですけれども、どう乗り越えていくのがいいのか、お知恵や思われるところをいただければと思います。

澁澤　今まで町づくりをやろうと思うと、行政がコンサルに依頼をして、コンサルが「町をこういうふうな形に」と提案してという例が多かったのですが、ちょうど私どもが地域づくりに関わろうという時にNPOという組織が出てきました。結局今、皆さんがおっしゃっているように、地域づくりって、やはり10年20年のスパンだと思います。それから、ひっぽさんも、やはりああいうNPOができて、初めてIターンを受け入れるという形ですけど、ふつう東北ですと、だいたいIターンで入ってその村の一員になれるのは三世代先って言われましたね。だから、だいたい60年から90年ぐらいでやっと村の一員、つまり、孫が生まれる時に初めて村の一員といって認められるというのが、全国的に当たり前だった時代が続いてきたのだと思います。その意味ではやはり中間のNPO的なところがそういうような、ある意味ではノウハウを蓄積していってその部分を繋いでいく。10年ということは、その間に失敗もあれば成功もあることですから、その時間を共有していくことがたぶん重要なのだろうと。

それと、もうひとつは、どうしても中だけでそれを進めていくと、みんなも生まれてからずっとそこに住んでいますから、いろいろな利害関係ですとか、もっと言ってしまうと先祖の時の水争いですとか、そこまで遡ってしまうのですね。やはり、よそ者の役というものがあって、よそ者は基本的には何か新しいノウハウを持って行くというよりも、地域にとってよそ者が入ることによって、公平的なジャッジとまでは言えないにしても、少なくとも「第三者的に見てそれはおかしいよ」ということが平気で言える環境を作るということが、地域が変わっていく、ものすごく大きな要素で。それは何が違うかというと、今の地域をどうしようかではなくて、あくまでも未来の地域をどう創るかという視点で議論をしていかないと、集落の合意形成というのは確実にできていかないなと思うのですね。

未来を見るということに関しては、よそ者も元々いた人たちも同じなのですよ。例えば10年なら10年、私の関係したある地域は13年後のある１日の冊子を作りました。それは1997年だったのですけれど、2010年の自分たちの１日を書こうと言って５人の家族、つまり13みんな歳をとるのですね。子供はどこの学校へ行っているのか、親父は何をして働いているのか、朝の食卓には、誰と、誰と、誰がついているのか、そこで、朝食の食材はいったい地域のものがどのくらいあるのか、親はどうやって遊んでいるのか、というような一日のディテールを５つの家族で書いたのですよ。2010年にそれを見てみたら、だいたい85％くらいがそのとおりでした。だから13年先なんていうは、ものすごく遠い先のように、最初作った時は考えましたけれども、10年って、実は

10歳、歳を取るということなのですよ、みんなが。だから意外とリアルな話なのです。そのスパンで集落というのを、10年後をどうするかから今に、バックキャストつまり、落としていくという考えが必要なのだろうなというふうに思います。

井上　私は基本的に、地域づくりというのは終わりがない、というふうに思っています。要はここまででいい、という地域づくりはないのですね。ここまで行ったらまた次の課題が出てくる。これ、一生というか、ずっと永久に考え続けないといけない、行動し続けないといけないというのが地域づくりだと思っています。もう本当に長いスパンが必要だと。ただ、この急転していく世の中で、じゃあ本当に10年先20年先を考えながらじっくり考えてやっていきましょうっていうと、なかなか、そういうわけにもいきません。現実、本当に人がいなくなってしまう、集落が消滅するという。そういう中で、じゃあ20年先考えてどうしましょう、じっくりそれまでに考えてやっていけばいいよね、っていうだけではなかなか駄目なので。

とすると、二つの方法を、私は、いつも、やらせていただいていますけど。地域づくりという、皆さんでモチベーションを上げながら地域の誇りを皆さんで感じる、地域を愛する心をどう醸成するかという方向のものを一つやると同時に、もう一つはビジネスとしても、きちんと生かしていける、何かこう小さくてもいいから、何か少しでもお金になるものを作りこんでいく。そういうものをまた、地域づくりのための活動資金に回していくという、そういう形でできないだろうかと。本当に、小ちゃなコミュニティビジネスみたいなものを同時に興していきながら、それを回して。結果的には、将来、10年先20年先の到達目標、数値化した目標というのは当然必要なのですよ。ですからそれは、10年先20年先、に向けて今何をしていくかということを常に考えていく、ということが必要なのかなと、そんなふうに思っています。

図司　ありがとうございます。お二方からそれぞれ、視点であったり、10年と今はそんなに遠くないのだよ、ということから共通したお話をいただいたのかなと思います。

と言っているうちに、実はけっこう時間が迫ってきておりまして、最後、一巡になると思うのですが。吉澤さん、改めて、他の地域を聴いて思われたこと、あるいは改めて井上さん、澁澤さんに相談したいことを、ぜひ出してください。今日は、診療所の所長（井上さんの肩書きから）もいますし、千年先（渋澤さんの肩書きから）を考える人も来てますので、何かしらの知恵を頂けるのじゃないかということも期待して、最後、現場のお三方から一言ずつ今日の感想、相談したいことを挙げていただいて、澁澤さん、井上さんにご回答いただくことで、閉めていきたいと思います。

吉澤さんお願いします。

吉澤　喋らないで聴いているだけでも、僕は勉強になったので満足なのですけれども、放射能汚染からどのように地域づくりをするかという点に関しては、本当は、皆さんに言いたいのですね、「皆さんも一緒に考えてください。」と。ただ、リアル感がないので難しいと思います。そこは地域で考えていきたいと思います。やはり、僕としては、筆甫地区に移住して９年になるのですが、受け入れてもらっている感はあるのですが、まだまだ、よそ者のつもりで、ずっとよそ者でいいと思っています。よそ者だからできることがあって、よそ者を使ってもらって、地域の方ができることもあると思っています。

今日お話ししたひっぽUIターンネットの活動は「人」にこだわっていますが、単なる「数」の問題でもないと思っています。大切なのは、地域の方々の、今の70代80代90代の方々の思いを引き継いだ人材がどれだけ生まれるか。そういう心のある数というか、心を繋いだ人の数をどれだけ生み出せるかというのが地域の課題だと思っています。今日、会場を見渡しても、行政職の方はもちろんだと思うのですけれども、こういう場に足が運べる人というのも60代、70代だったりして。じゃあ

実際、地域に帰って、次の世代をどうするの、といった時にそれがなかなか見えてこない。うちの地区では、そこがもっとも課題です。もし、お聞きできるのであれば、そういう次の世代を担う方々を、心を踏まえたうえで生み出していくためには、診療所的にはどんな治療が必要なのかなというのを教えてもらいたいと思いました。

寺本　A級グルメの中核を担っている人材がうちでは総務省の「地域おこし協力隊」の事業を活用させていただいて「耕すシェフ」ということなのですけれども、この「耕すシェフ」、どういう意味かといいますと、当初、野菜作りから料理まで一貫してできる人材を邑南町で育成することによって、今まで外に物を売りに行って、百貨店ですとかホテルに売り込みを掛けたり、特産市をやったりして、なかなかうまくいかなかった部分を、地域の農産物を、彼らが自分たちで作って、自分たちで料理してくれれば、農家の交流も生まれるし、若い力が農家としての自信を取り戻してくれるのじゃないかな、というふうな思いで付けたのが「耕すシェフ」なんです。今日、昨日といろんな方のお話を聴いていく中で、「耕すシェフ」というのは今後、邑南町において、日本においてもカルチャー、文化を耕していかないといけないのかな、と。その辺で、田舎だからこそできること、やれることを邑南町からどんどん発信していきたいなと思う気持ちが強くなりました。

それと、ご質問と言いますかそういったことでは、そういった若い方が移住してやってきてくれているのですけれども、そこと地域の、地元の農家の方とか住民の方といかにうまくコンタクトが取れて、受け入れられていくのかと。IターンはIターンだけで繋がっていくという感じじゃなくて、地域の中で溶け込めていくようにするにはどういうふうな、「耕すシェフ」がどういうふうに住民に浸透していくのかな、ということを。いろいろやってはいるのですけれども、もし、いい案があれば教えていただければなと思っています。

図司　ありがとうございます。それでは最後に鈴木さん。いかがでしょうか。

鈴木　先程、７年間経ったけれども数字的な成果が出ていないというふうに申し上げましたが、数字こそ成果は出ておりませんが、都市・農山村交流ネットワークの山本さんがよく言うのですが、農山村に風が吹いてきた、吹いている、といようなことを言われます。それは先程の企業や労働組合、それから住人の若者の取組などから非常に感じられることです。で、もう一押しすれば数字的な効果も…仮に数字的な効果が出ないにしても、新しい価値の創造が都市と農山村の関わりの中でできるのじゃないかな、というふうに思いました。

そこで、質問というか、こうしたいなと思うのですが、アドバイスいただきたいのは、ひとつは先程、澁澤先生がおっしゃいました「橋渡しをする仕組み」のことです。これについては、都市部の風、農村の風、ともに吹いていて、うまく繋げば一気に進むだろうと思うのですが、そこのところを、今はNPOの方に依存しきっている。市でいえば支所がそういった機能も果たしておりますけれども、いまひとつしっくりしていないので、澁澤先生の言われる「橋渡しの機能」というものを現実のものにしたいというふうに思うのですが。先程のひっぽさんは、民間でありながら行政の助けを得ずにあそこまでやられた、すごいなあと思いますけれど、そういうのを「待つ」なのか、もっと加速をするためにどうしたらいいのか、ということについてひとつ聞きたいなと。

もうひとつが、井上先生にお聞きしたいのですが、昨日のお話で邑南町の「耕すシェフ」の安達さんがおっしゃっておられましたけれども、「うまくいっている事業というのは、常にその後にチャレンジし続けているということがある。なので、自分の取組も常にチャレンジし続けたい。」と。そうしたとき、邑南町の役場は「これは言っても駄目だろうな。」と思うことを「これできませんか？」と言ったら「やってみんさい。」と言われると。そういうことを、昨日、聴きました。これが大事かなと。井上先生のおっしゃるスモールビジネスといい

ますか、コミュニティビジネスをどんどん興していくためには、そういったチャレンジをすることをぐっと後押しするような仕組みを作りたいのですが、税金というのは結果が出てなんぼといいますか、結果が出ないことにお金を使っては、もう失格なのですね。そこのところをチャレンジに使っていいけれども、行政がそういった仕組んだ支援策に、民間の資本を入れるとか、何かいい知恵がないかなと。私としてはぜひ、橋渡しをする仕組みと、いろんな人がどんどんチャレンジできる支援の仕組みを作りたいと思っていますが、アドバイスをお願いします。

図司　ありがとうございました。共通するキーワードは「つなぐ」かな、と思いましたけれども。澁澤さん、井上さん、どちらからいきましょう？澁澤さんからでよろしいですか。お願いします。

澁澤　お三方からお話しいただいて、まさにコーディネーターの図司先生がおっしゃったとおり「つなぐ」ということなのだと思います。世代と世代をどうやってつなぐか、人と人をどうやってつなぐか。先程、井上さんが、一番、最初に「土が重要です。」と。要するに自然と人間をどうやってつなぐか。この間、ブータンの国王が来られて「ブータンは幸福度で判断をしています。」と。その幸福度というのはなにか、というのは「人と人との関係性、それから人と自然の関係性、世代と世代の関係性が良好なことを幸福という。」というふうにブータンでは言っています。これ、ある意味では地域づくりの核みたいなものなのだろうな、というふうに思っています。

私のお伝えしたいことは二つあって。ひとつは私、実はこの一年以上、被災地に何回か通わせていただいています。すべてをなくした地域にいったい、なくしていない人間がどう関われるのか、ということの問いかけでもあったのですが、今、完全に被災地の方々と一年半たって対等になったなという感じがするのですね。それはなぜかというと、彼らは、全部なくしたからもう一回作り直すという時に何が大切なのかということを、この一年半かけてものすごく学んでいるのです。それはもう教わることがものすごくたくさんある。一番大切なことは、そこでどういう暮らしを作るかということが一番重要だと。それは防潮堤ではないし高台移転でもなくて、どういう思いを持った人たちがどういう暮らしを作っていくのかということが一番重要。その次に出てくるのは自分たちの食べものだとか、エネルギーだとか、水だとか、教育だとか、医療だとかという、自分たちにいったい何が必要なのかということを、一回具体的に作り直していく。その中で産業が出てくるのだけれども、先程から出てくるコミュニティビジネスというのは、小銭稼ぎのビジネスじゃないのですよね。コミュニティビジネスというのは、物を介在としたコミュニケーションだと私は思っています。ですから、その物が動くということによって、そこに思いが伝わったりとか、人と人との関係ができてくるというのをコミュニティビジネスだと私は思っておりまして、そういう関係性が初めてそこで出きていく。その時に地域の経済を見てみると、先程「外貨の獲得」というお話があったのですけれど、ものすごい地域の資金が出ていっているのは、明らかに教育と医療なのですよ。高校へ行かせるとだいたい年間100万円くらいですから、要するに、300万くらいのお金が出ていきますし、大学へ行かせると１千万くらいのお金が出ていきます。これが、地域から、そのまま出ていっている。だから、どんなに外貨を獲得しても、この部分を自分たちで、地域教育っていったい何か、どういう人間たちをここに育てていくのかということを、自分たちで考えなきゃいけないですし。それから丸森町さんの医療の話が出てきましたけれども、ある意味では、どういう医療を自分たちは得ようとするのか、そのためにはドクターヘリだとかインターネットだとかいろいろ媒体を使ってどうデザインするのかということを、地域側が判断し選択することが求められている、という感じをひとつしました。

その中で「つなぐ」ということが出てくるんですけれども、私はその橋渡しをするのは、NPOだとか行政だとか、何もそこで区切る必要は全然ないと思っていて、要するに大きなプラットホームを、というか、それはまあ言うならばスーパーNPOなのですが、例えばヨーロッパに行くとお役人さんたちもだいたい５つか６つのNPO、NGOに属されています。どんな小さいNPOも、だいたい会員の数は30万人ぐらいですね。ということは、仕事、日常業務をするということと地域のことをすることと、両方できて一人前の人間だとみなされる、ということなのです。私どもはただ会社に勤めて、あるいは役場に勤めて、そのルーチンの仕事だけをすることだけが仕事だと思ってきた、この50年がおかしいので。逆のこと言って、地域をどうするかということも、行政と

NPOが一緒に入った組織を作ればいいと思う。そこで、ちゃんとお金と実績の問題をどう心と豊かさの問題に、暮らしの問題に変えていけるかという翻訳をやる。そのことを地域全員あるいは行政もそこに入って、一人の人間として考えようよ、という組織、というか場が必要でありそれをはっきりと謳うことが、重要であると感じております。

図司　井上さん、いかがでしょうか。

井上　非常に重たい質問ですね。

ひとつは今、澁澤さんが言ったように暮らし方、どう暮らしを作り込んでいくかという、新しい村の考え方。過疎地域として考えなきゃいけないのは、暮らしを提案するということが必要になってくるのですね。こういう暮らしがこれからの日本人の暮らし方だよ、っていうのが、ひとつ提案ができるといいかなと。私の資料の方で一つ出したので、過疎・高齢化の課題というのはまだ残り続けているという中で、じゃあ何を選択して次へ伝えていくか、そういう中でやはり必要だったのはコミュニティビジネス。コミュニティビジネス自身も被災地で、仲間同士で物資を交換し合っていた、救援物資がきた、その救援物資を分ける、そういう場所がコミュニティビジネスの場に変わっていったのですけれど、そういう意味では非常にソーシャル的なビジネスであったと。それから、いくら外貨を稼ぎました、というビジネスではない部分、まさに仲間同士がここで新しい村を再生していくという意味でのコミュニティですね。それを、そのまま物々交換からビジネス化していったという、要はまさに地域づくりそのもの。８年前の山古志、ちょうど10月に震災があったわけなのですけれども、それが復興過程でそんなような経過を辿っていったということで、非常に大事な視点が山古志にはあったなと、いうふうに思っています。

先程、いくつか質問があった中で、「耕すシェフ」をこれからどうしていくかと。実は澁澤さんがやっている塾ですね、「豊森」の塾なんかもそうなのですけれど、ここにひとつヒントがあるんじゃないかなと。やはりひとつは、いかに自分たちの村・集落に学びの風土を作り込んでいくか、学びの土壌を作り込んでいくか。「学び合う」ということが、結局それが暮らしを支え合う、あるいは新しい暮らしを作りこんでいくということの、ひとつの情報発信でもあり、情報共有でもあり、非常に大事な点になってくるのですね。この「学び」を忘れたとたんにたぶんその集落は駄目になっていく、というふうに思っています。

それから、いかにこの「耕すシェフ」なんかをうまく活用しながら、「学び」ということで、カフェという良い場で、みんなが何げなく寄り添って、「会議あるからみんな集まってよ。」じゃなく、なんとなくふらっと行ったら何か面白いことがあるよね、という、そういうような空間があるということが非常に大事ですから。そういう場があって人がいる、面白いよね、っていうことが「耕すシェフ」として展開できていくのがいいのかなと思っています。

それから「橋渡しのシステム」ということなのですけれど。今、地域に足りないと言われているものが、ひとつは全体的に俯瞰して見える、そういうものをきちんとできる、見ることができるプロデューサーがちょっといないという、それが問題なのですね。それからもう一つ足りないのが、いわゆるチャレンジャーが足りない。今、地域おこし協力隊とかそういうところでチャレンジャーたちがあちこち全国に入っているわけなのですが、まだまだ足りない。それからもうひとつ大事な点で、先程も質問があったのですが、民間の支援、いわゆるそういったスポンサーがほしいのですね。行政が、よくわからないのに金を出せないという。確かに幸福度に対してどうやって金を出すかという。事業評価されたときに「何なの？」って言われてしまう。まさに数値の目標達成ができない、数値が見えないものに対してなかなか税金はかけられないということがあります。「あの人が何回笑ったから、これ成果あったよね。」ってなかなか言えないわけですからね。そういう意味では新しいそういうもの、笑顔に対する支援をしてくれる人、そういうスポンサーをどう募れるかというのがこれから重要な視点にな

ってくる。そういう意味で、企業のCSRとかそういう中でそのくらい考えてくれる企業が欲しいですし、個人的にもそういうものに対して支援してくれるスポンサーづくり、スポンサー探しっていうのは必要なのかなと。

この三つが不足しているので、ここをうまくシステム的に作りこんでいく、さらに「橋渡しのシステム」として、世代を繋いでいける持続的な組織、これはプロパーが行政の職員だと常に人事異動で替わってしまいますから、そうではなくてプロパーの社員を持てるというか、職員を持てるような組織を作っていく必要があると。これちょっと、組織のほうになってくると細かい話になるので今日は話をしませんが。そんなことが必要なのかなと、思っております。

図司　ありがとうございました。

限られた時間ですがフロアの皆さんからご質問なりいただきたいと思いますけれど、いかがでしょうか。せっかく実践をされている皆さん方もいらっしゃいますので、ご質問などございましたら挙手をしていただければと思います。

会場　井上さんのお話し中で最後に「全体を見渡せるプロデューサーが必要」ということがありましたが、チャレンジャーはプロデューサーが見つかれば、村の中でみんなでうまくできるかと思います。スポンサーももしかしたら大きな都市が近くにあれば、豊田市などであればトヨタ自動車、県内であれば大きなところがあると思います。そのような中で、そこの地区に必要な全体を見渡せるような、行政の人間ではない、プロデューサーをどのように発掘して、どのように育てていってそこに引き込むかということをお聞きしたいと思います。

井上　初期的な段階ではやはり外部人材をちょっと入れていただいて、その外部人材と一緒に育ってもらう、ということじゃないかなと思います。澁澤さんも長く豊田に入っていますから、ぜひ澁澤さんの弟子をたくさん作り込んでいって。「豊森なりわい塾」の中から出ませんかね？出てるのじゃないですか、すでにもう。いかがでしょう。

澁澤　世代と世代というのは結局、背中を見て繋がっていくということしかしょうがないのかなっていう思いもありますし、それからこうやって民間の仕事をしていますと、「豊森なりわい塾」はトヨタ自動車さんがスポンサーなのですね、だから非常に自由にさせていただいているのですが、結局、人材育成って、公平では人材は育たないのですよ。やはり一本釣りとえこひいきなのです。「こいつは！」という一本釣りで、えこひいきで育てていくしか、私は、人材は育たないというふうに思っています。企業の人材育成も確実にそうです。公平性だけでやっていると人材はなかなか育ってこない。その部分はやはり徹底的に上から下へ教育して、一人の人間を育て上げていくってことがある。その入口としてはまさに、井上さんがおっしゃったような外部人材を入れて、その彼に育てさせながら、今度はその彼がまた次をやっていけるような、自己増殖型の機能を地域内に作っていくということしか、私はないのかなと思っております。

会場　ありがとうございました。

図司　時間の関係もありまして、ご質問ここで止めさせていただきます。今日は格好の場が、このあと用意されておりますので、「田舎を語ろう！全国くるま座ミーティング」に参加される方はぜひ、そちらにこの余韻を持ち込んでいいただいて。澁澤さん、私も参上しますので、また延長戦をさせていただきたいと思います。

私の方からあえてまとめはいたしませんけれども、なにより現場の皆さんの実践と、井上さん、澁澤さんのような「風の人」がうまく今日は折り合って、皆様方に何かしらためになるパネルディスカッションになっていれば、私としては幸いだなと思っております。何よりこのようにわざわざ全国からシンポジウムにお集まりいただいた場自体が、「学び」の場だろう。学び合うという

話が先程ありましたけれども、そういう場でもありますので、このネットワークをぜひ来年も繋いでいきながら、また別の機会にも広げていただきながら、現場の方でも生かせていただければと思います。

短い時間で物足りない思いもいたしますけれども、時間の関係もあります、この場で閉じさせていただきたいと思います。パネラーのみなさんどうもありがとうございました。